

こんにちは！ 室長の工藤です。

青森ねぶたについていつも思うことですが、藩政時代の一次史料にあまり出てこないのは何故なのでしょう。単に史料を書き残した人が興味がなかったのか…。

そして、この夏、増補版が発刊された『青森ねぶた誌』でも「残念なことに運行の詳しい様子や山車としての『ねぶた』の形態については記録がない」ともあります。

ところで、つい先ほど青森浜町の商家滝屋の史料に興味深い記述を見付けました。日付は明治3年(1870)8月25日で、翌月の9月3日に青森町の総鎮守毘沙門堂で祭礼が行われると市中にお触れが出されたことを伝えています。当時の青森町は「青森衰微」と称されるように町の勢いが衰えていて、弘前藩庁がてこ入れを行っていました。この祭礼にも藩主の承^{つぐあきら}昭をはじめ重役たちが列席し、にぎやかに祭礼が執行されるよう企図されました。



毘沙門堂周辺(『新青森市史』資料編4付図「青森町絵図」〈貞享～元禄初年〉トレス)

この毘沙門堂の祭礼にはかつて「ねり物」が出ていたものの、51年前から途絶えてしまっていたといいます。今回これを復活させようというのです。米町では曾我五郎と朝夷名三郎とよろい引きの人形、大町は夷三郎、そして博労町は猿田彦太神、うずめの命…いずれもねぶたの題材としてよく目にするものですよね。これを修復して出そうというのです。3町の人々は家業も打ち捨てて昼夜を分かたず作業に取り組んでいるとか。



ねぶた「曾我五郎朝比奈三郎」
(昭和9年8月、歴史資料室蔵)

これら3町のほかに、浜町では館船(小船)のねり物を新調し、これに車を付けて子どもに引かせようとしています。そのほかの道具類はかつての町名主が箱館に売り払ってしまったようですが、小太鼓が2つ残っているのもうこれを使う心づもりでいるようです。

そして、当日の記録も残っています。これらのねり物は9月1日から町内を引いています。にわか仕込みの「はやし方」も参加し、米町のはやし方は帆懸烏帽子に素襖姿であったと記してあります。

寺町・鍛冶町・大工町などねり物を持たない町々も参加し、まさに青森町あげての祭礼であったといえます。もちろん、これは七夕祭とは時期も異なりますし、「ねぶた」という文言も出てきません。しかし、極めて「ねぶた」のようすに近いものではないでしょうか。

一次史料が少ない藩政時代の「青森ねぶた」研究の参考になる面白い記録だと思います。

さて、12月もまだ半ばではありますが、今年の「あおもり歴史トリビア」の配信は今回が最後となります。新年は1月6日の配信からとなります。

1年間、ご愛読ありがとうございます。

皆様、どうぞよいお年をお迎えくださいませ。